

烈火の太洋4

中部ソロモン攻防

横山信義

Nobuyoshi Yokoyama

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

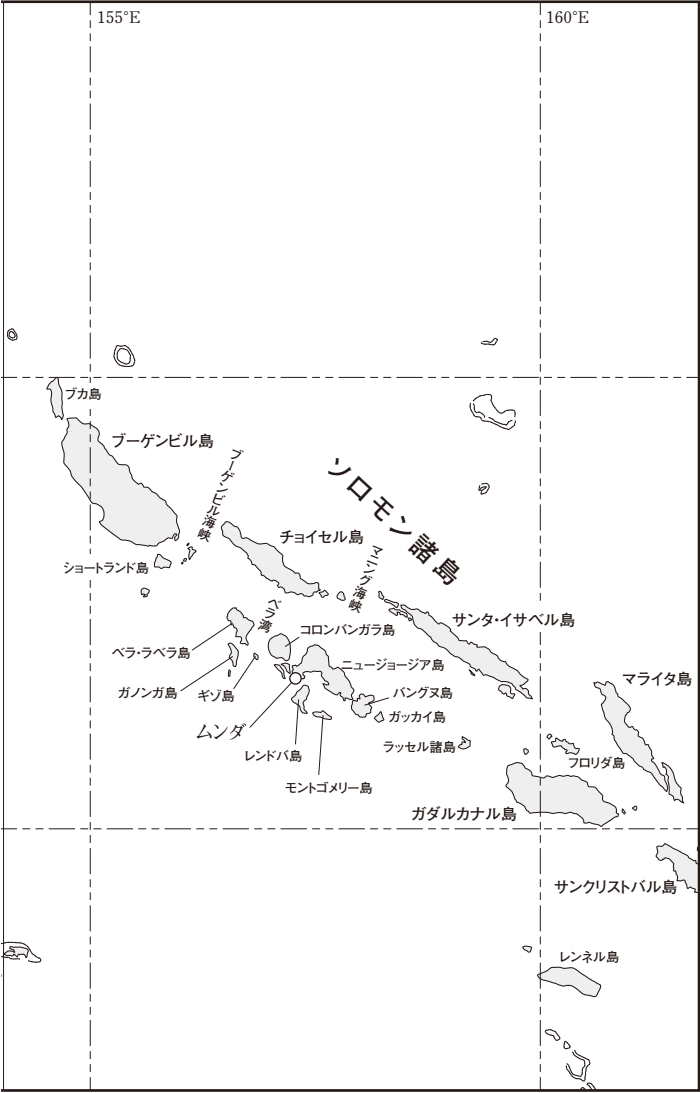
扉 画 高荷義之

地図・図版 安達裕章

編集協力 らいとすたつふ

目次

第一章	ソロモンの航空要塞	9
第二章	地中海の熱風	49
第三章	機動部隊強襲	73
第四章	戦闘攻撃機「月光」 げつこう	127
第五章	ダンピール海峡の咆哮 ほうこう	155
第六章	反攻の嚆矢 こうし	211



ソロモン諸島周辺図



烈火の太洋 4

中部ソロモン攻防



第一章 ソロモンの航空要塞

1

「指揮官機より受信。『突撃隊形作レ』」

偵察員席に座る小野義範飛行兵曹長が報告した。

「後続機に合図を送れ」

空母「飛龍」艦爆隊長小林道雄大尉は、小野に命じた。

昭和一七年三月一日。

ソロモン諸島の中央部に位置するサンタ・イサベル島の北方海上だ。

眼下には、八ヶ月半ぶりに相まみえる米軍の空母機動部隊が見える。

その八ヶ月半の間に、第一航空艦隊は建制化され、第三艦隊と改称された。

中核となる正規空母は、第一航空戦隊の「赤城」「加賀」、第二航空戦隊の「蒼龍」「飛龍」、第五航空戦隊の「翔鶴」「瑞鶴」だ。

五航戦の二隻は、二航戦の「蒼龍」「飛龍」と同じく、最初から空母として設計・建造された艦で、昨年八月から九月にかけて竣工した。

常用七二機、補用一二機の艦上機運用能力を持ち、「現時点における最良の空母」との評もある。

これに護衛として、第三戦隊の高速戦艦四隻、第八戦隊の重巡二隻、第一〇戦隊の軽巡二隻と駆逐艦一六隻が付く。

艦上機は、常用機だけで三八七機だ。

最初の任務は、ニューギニア島ムンダに米軍が建設した飛行場の制圧であり、第三艦隊はこの日の夜明けまでに、ムンダの真北一八〇哩の海面に進出した。

五時（現地時間七時）には、第一次攻撃隊一八〇機が、ムンダの敵飛行場を目指して飛び立つ予定だった。

ところが、この前日、伊号第一二二潜水艦から送られた緊急信により、状況は一変した。

「敵艦隊見ユ。位置、『マライタ島』（ソロモン諸島東部の島）北端ヨリノ方位一〇度、六〇哩。敵ハ空母二隻ヲ伴フ。巡洋艦、駆逐艦ノ数不明。敵針路二八〇度。一三二七（現地時間一五時二七分）」

報告を受けた第三艦隊司令部は、

「最優先目標は、伊一二二が発見した敵機動部隊。ムンダの敵飛行場は、敵機動部隊の撃滅後に叩く」と決定し、未明より索敵機を放った。

過去の海戦では、索敵機が発進してから敵艦隊を発見するまでに、二時間から三時間程度を要するのが通例だったが、この日は一時間と経たぬうちに、「敵ラシキモノ約二〇」の報告電が飛び込んだ。

位置は、ムンダよりの方位四〇度、一六〇哩。

第三艦隊との距離は、約一一〇哩だ。

敵艦隊は、思いがけず近い場所に出現したのだ。第一次攻撃隊は直ちに発進し、四〇分余りの飛行の後、敵艦隊を捕捉したのだった。

攻撃隊の編成は、零戦五四機、九九艦爆七二機、

九七艦攻五四機。

第一、第二航空戦隊の艦爆隊と、今回が初陣になる第五航空戦隊の艦攻隊という組み合わせだ。

艦攻隊は、敵艦隊の左右へと回り込みつつある。輪型陣の中央にいる二隻の空母を、左右からの同時雷撃によって葬るつもりであろう。

小林は後方を振り返り、「飛龍」艦爆隊一八機が第一中隊と第二中隊に分かれて、斜め複横陣を形成していることを確認した。

「陣形だけは様になっているが……」
との呟きが漏れた。

昨年六月のビスマルク諸島沖海戦終了後、一、二航戦の艦上機隊は、大幅な戦力減に見舞われた。

同海戦で、多数の戦死者を出したことに加え、新鋭空母「翔鶴」「瑞鶴」に配属する搭乗員、それも中堅以上の者を引き抜かれたためだ。

小林が率いる「飛龍」の艦爆隊からも、六名が五航戦の艦爆隊に転属している。

搭乗員の補充は受けたものの、艦爆の基礎訓練を修了したばかりの若年搭乗員がほとんどを占めており、全体の技量は大幅に低下した。

一、二航戦では、新規に配属された者に実戦さながらの猛訓練を課し、技量の向上に努めた。

小林が見た限り、新人たちは、操縦、航法、通信等の基本的な技術については、水準以上の技量を身に付けている。

ただし、訓練はあくまで訓練だ。実戦については、経験を積んでいくしかない。

「指揮官機より受信。『二航戦目標、二番艦』『全軍突撃セヨ』」

報告の直後、伝声管から小野の切迫した声が伝わった。

「グラマン、後ろ上方!」

小林は、軽く舌打ちした。

敵戦闘機に対しては、機体同士の間隔を詰め、旋回機銃で弾幕を張って対抗するのが常道だが、艦

爆隊は既に降爆用の陣形を組んでいる。

敵機には、個別に応戦するしかない。

「飛龍」艦爆隊に付き従っている零戦が、次々と機体を翻し、敵の直衛機——グラマンF4Fワイルドキャット——に機首を向ける。

小林は振り返ることなく、「飛龍」隊を誘導する。

「グラマン二機、二中隊に接近!」

「坂出機、樋口機、被弾!」

小野の悲痛な報告を受け、小林は唇を噛みしめた。

第二中隊の最後尾に位置していた二機だ。今回が初陣となる若年搭乗員のペアが乗っている。

四名の若い艦爆乗りが、実戦経験を積む間もなく、敵艦隊を目前にして散華したのだ。

「グラマン来ます! 右後方!」

小野が叫ぶや、小林は機体を左右に振った。

後席から、機銃の連射音が届く。小野が七・七ミリ旋回機銃を振りかざし、応戦しているのだ。

敵弾の曳痕えいこんが小林機の左右を通過する。主翼をすれすれにかすめるものもあるが、被弾の衝撃はない。F4F二機がフル・スロットルの爆音を轟とどろかせ、小林機を追い抜く。

小林は発射把柄はへいを握る。機首二丁の七・七ミリ固定機銃から、二条の火箭かせんがほとばしる。

七・七ミリ弾がF4Fの下腹したはらに吸い込まれたように見えたが、敵機が火を噴く様子はない。

F4F二機が一旦距離いったんを置き、反転しようとしたとき、小林機の頭上を黒い影がよぎった。

零戦のスマートな機影が、F4Fの真正面から突進し、両翼から太い火箭が噴き延びた。

正面から二〇ミリ弾を喰くらったF4Fが、機首から炎と黒煙を噴き出し、ひとたまりもなく墜落する。

もう一機のF4Fは機体を横転させて垂直降下に転じ、「飛龍」隊の前から姿を消す。

「助かった……！」

たった今自機を援護してくれた零戦に小林が視線

を向けたとき、その零戦が強烈な閃光せんこうに包まれた。零戦の姿は瞬時に消失し、無数の火の粉が八方に飛び散った。

小林が息を呑のむ間もなく、「飛龍」隊の周囲に次々と爆発光が閃ひらめき、爆風が左右から押し寄せた。

「飛龍」隊は、敵艦隊の射程内に踏み込んだのだ。

「志村機被弾！ 宮原機被弾！」

敵弾の炸裂音さくれつがひっきりなしに響ひびき、機体が爆風に翻弄ほんろうされる中、小野が報告を上げる。

今度は、第一中隊の所属機だ。

志村機の搭乗員は、先に墜おとされた二機同様、今回が初陣となる若年搭乗員だが、宮原機は開戦時から戦い続けている宮原直人なおと一等飛行兵曹が機長を務めている。

「ベテランも若年搭乗員ジャグもなしか」

口中で、小林は呟ささやいた。

敵戦闘機の攻撃は、腕次第しだいで切り抜けることも可能だが、対空砲火による墜落は運の要素が強い。ベ

テランであれ、新人であれ、死は平等に襲つて来る。小林自身も、次の瞬間には死を迎えるかもしれないが、恐怖は感じない。

麾下の艦爆を、降下点に取り付かせるだけだ。

敵弾がなおも炸裂する中、「飛龍」艦爆隊の四機は、敵二番艦を指して突き進む。

手前に位置する一番艦に降下したい誘惑に駆られるが、目標は二番艦だ。独断での命令変更は許されない。

前に行く「蒼龍」隊が、一足先に降下に入る。

指揮官江草隆繁少佐の一番機が、機体を右に横転させ、二番機以下が続く。

「去年の屈辱を晴らすぞ!」

「了解!」

小林の一言に、小野が力のこもった声で応えた。

「飛龍」艦爆隊は、「急降下爆撃の神様」の異名を取る江草隆繁少佐が率いる「蒼龍」艦爆隊と共に、機動部隊の中でも一、二位を争う技量を持つと言わ

れ、小林自身もそう信じていた。

ところが「飛龍」艦爆隊は、昨年のビスマルク諸島沖海戦で、拭いがたい汚点を残した。

敵空母一隻に攻撃を集中したにも関わらず、一発の命中弾も得られなかったのだ。

「飛龍」艦長加来止男大佐、飛行長川口益中佐は、「武運に恵まれぬ時もある。次の戦いで埋め合わせればよい」

と言ってくれたが、命中弾ゼロに終わった屈辱は消えない。

小林は、新たに配属された部下を厳しく鍛え、汚名を返上する機会を待った。

それが今、目の前にある。今度は、戦果を上げずにはおかぬ。

小林は爆撃教範に従い、主翼の前縁に敵空母を重ねた。エンジン・スロットルを絞り込み、急降下に転じた。

漂う爆煙が視界の中で回転し、敵空母が正面に来

る。自機と敵空母の間に、先に降下を開始した「蒼龍」隊が見える。

「二八（二八〇〇メートル）！ 二六！」
フタハチ フタロク

後席の小野が、高度計の数字を読み上げる。

「二番機以下、どうか？」

「本機に続行中。二二！ 二〇！」
フタフタ フタマル

小林の問いに即答し、小野はなおも高度を報告する。

小林機の高度が二〇〇〇メートルを切ったところで、「蒼龍」隊が次々と引き起こしにかかった。

逆落としに突っ込んでいた九九艦爆が、敵空母の艦橋をかすめるようにして、後方へと抜けてゆく。

（どうだ？）

小林は自機を操りつつ、「蒼龍」隊の成果を見守った。

敵空母の周囲に、至近弾の水柱が奔騰し始める。

江草機は失敗したようだが、二番機以下は江草機の弾着を見て、投弾コースを修正している。

「四番機はどうだ？ 五番機は？ 二中隊は？」

小林はそう呟きながら、機体を操り続けた。

五発までが空振りに終わったが、六発目が直撃し、敵空母の飛行甲板に閃光が走った。

「よし！」

小林が快哉を叫んだときには、更に二発が続けて命中する。

空母の飛行甲板は黒煙に覆われて見えなくなるが、新たな命中弾の爆風が、火災煙を吹き飛ばす。

（敵空母は何だ？）

小林は、敵空母の型を見分けようと目を凝らした。ビスマルク諸島沖海戦で仕留め損ねた空母が、エルカネー級という小型空母であることは、米軍捕虜の供述により、明らかとなっている。

米軍には珍しい、平甲板型の空母だ。

艦橋の有無が分かれば、級名がはっきりするが、敵空母の飛行甲板上には、どす黒い火災煙がわだかまっており、艦形をはっきり見極められない。

「飛龍」隊の番が来た。

「マルコン
〇四（四〇〇メートル）！」

「てっ！」

小野の報告と同時に、小林は爆弾の投下レバーを引いた。操縦桿を目一杯手前に引きつけ、引き起こしにかかった。

下向きの遠心力が全身を締め付け、しばし目の前が暗くなる。

訓練でも、実戦でも、嫌というほど繰り返されたが、何度経験しても、慣れることはない。

機体を水平に戻したとき、小林機は海面すれすれの高度を飛行している。

前方に、九七艦攻が見える。

五航戦の艦攻隊が投雷を終え、離脱せんとしているのだ。

「命中一発！ 二発！」

「よし！」

小野の報告を受け、小林は小さく叫んだ。

ビスマルク諸島沖の不名誉は、これで返上した。

「飛龍」隊は、最低でも二発の命中弾を得たのだ。

「三発！ 四発！」

小野の報告が続く。

最終的に、六発の命中弾が確認された。

小林は降下中、敵空母の艦上に、五回の爆発を確認している。「蒼龍」隊が五発、「飛龍」隊が六発、合計一一発の二五番（二五〇キロ爆弾）を、敵空母の飛行甲板に叩き付けたのだ。

「水柱一本！ 二本！」

小野が二五番の命中に続いて、雷撃の成果を報告し始めた。

九一式航空魚雷が、敵空母の水線下を貫いているのだ。

小林機が輪型陣の外側に脱出するまでの間に、合計三本の命中が確認された。

「撃沈確実だな」

上昇に転じながら、小林は呟いた。

空母の頭上からは九九艦爆が逆落としに突っ込み、左右両舷からは九七艦攻の雷撃が襲って来る。

艦爆と艦攻が包み込むような攻撃で、爆弾一一発、魚雷三本を命中させたのだ。

ヨークタウン級であれ、エルカネー級であれ、生還できるとは思えなかった。

数分後、小林は三〇〇〇メートルの高度から、第一次攻撃隊の戦果を確認していた。

輪型陣の中央に位置していた二隻の敵空母は、艦首から艦尾までを炎と黒煙に覆われている。

行き足は完全に止まっており、周囲には、どす黒い重油が広がりがりつつある。

正規空母六隻分の艦上機が持つ攻撃力の凄まじさを、敵空母二隻の惨状が物語っていた。

空中には、投弾、投雷を終えた艦爆、艦攻が集まりつつある。

予想されたことではあったが、機数は大幅に減少している。ざっと見ただけでも、三割から四割が未

帰還になったようだ。

戦力面で圧倒していても、これだけの犠牲が出るのか、と嘆息せずにはいられなかった。

小林は、「飛龍」艦爆隊の先頭に立ち、機首を西北西に向けた。

一一〇涅槃に、母艦が待っている。

2

敵機は、第一次攻撃隊の帰還前に、第三艦隊に殺到して来た。

「あいつか！」

空母「加賀」の戦闘機隊第二中隊長結城学大尉は、小さく叫んだ。

一五機前後と思われる編隊三隊が、海面に近い低空を飛び、第三艦隊を目指している。

(電探が探知した通りだ)

結城は、賛嘆の呟きを漏らした。

ビスマルク諸島沖海戦の終了後、第三艦隊の正規空母には、盟邦ドイツの技術援助を受けて開発された二三号電探が装備されている。

探知距離は、単機であれば四〇哩、編隊であれば六五哩だ。

敵機が六五哩の距離を詰めるまで、約二〇分。緊急発進した零戦が、高度三〇〇〇メートルまで上昇し、迎撃態勢を整えるには、充分な時間だ。

最も早く敵影を捉えたのは「加賀」の電測室で、六時五一分（現地時間八時五二分）、

「電探感三。方位一五〇度、五五哩」

との報告が、戦闘艦橋に上げられた。

「加賀」艦長岡田次作大佐は、全艦隊に急を報せ、第三艦隊司令部は、第二次攻撃用に準備した零戦全機を迎撃に充てると決定したのだ。

直衛隊の指揮を執る白根斐夫大尉の零戦が大きくバンクし、突撃の合図を送った。

「蒼龍」「飛龍」の零戦隊が、いち早く機体を翻し、

「赤城」隊、「加賀」隊も続く。

結城は「加賀」隊の先頭に立ち、第二中隊を誘導する。

ビスマルク諸島沖海戦後の人事異動で、結城は大尉に昇進すると共に、「加賀」艦戦隊の第二中隊長に任ぜられ、自機も含めた零戦九機を指揮する立場になった。

これまでは、一個小隊三機だけを見ていればよかったが、指揮する機体と搭乗員が三倍に増えたのだ。今度の作戦が初陣という若年搭乗員も多い。

自分自身の戦果よりも、中隊全体での戦果を優先すること。

一人でも多くの部下を生還させること。

この二つが、新任の中隊長に求められていた。

敵機と零戦の距離がみるみる詰まり、機体形状がはつきりする。

一式陸攻や九六陸攻と同じ、双発の中型機だ。九六陸攻同様、双尾翼形式を採用している。

ノースアメリカン B 25 ッミッチェル。今年二月から前線に姿を現した、米軍の中型爆撃機だ。

「空の要塞」ことボーイング B 17 ッフライイング・フオートレス。ほどの凄みはないが、運動性能は高い。防御火器も充実しており、正面攻撃をかけて返り討ちにあつた零戦もある。

それほど恐ろしい相手ではないが、油断は禁物だ。「蒼龍」隊、「飛龍」隊が、B 25 群の前上方から突進する。

敵機の胴体上面に発射炎が閃き、何条もの火箭が噴き延びるが、それに捉えられる零戦はない。右、あるいは左に旋回し、敵弾に空を切らせている。

散開した零戦は、B 25 群の左右から突進する。二個中隊一八機の零戦が、B 25 を包み込もうとしているようだ。

B 25 が、旋回機銃を乱射する。火箭が鞭のように、右に、左にと振り回されるが、それに掬め捕られる零戦はない。ワイリピン攻撃で初陣を飾って以来、

カーチス P 36 ッホーク、ブリースター F 2 A ッバッファロー、グラマン F 4 F ッワイルドキヤットといった戦闘機をきりきり舞いさせてきた運動性能が、被弾を許さない。

「蒼龍」隊の零戦が、次々に一連射を放った。

射弾を放った機体は、すぐに右、あるいは左に旋回し、離脱する。B 25 に痛打を浴びせながら、直進する時間を最小限に留めている。

「蒼龍」隊が離脱したとき、三機の B 25 が炎と黒煙を引きずり、編隊から落伍しかかっていた。一個小隊が一機ずつを仕留めた計算だ。

このときには、「赤城」隊、「加賀」隊が、敵の中央集団に迫っている。

B 25 の胴体上面に、発射炎が閃く。

無数の青白い曳痕が殺到して来るが、それらに貫通される零戦はない。

機体を左右に、不規則に振り、乱れ飛ぶ敵弾をかくいくぐりながら、B 25 に肉薄する。

結城は、発射把柄を握る左手に力を込めた。両翼に発射炎が閃き、真つ赤な火箭が噴き延びた。

二〇ミリ弾の赤い曳痕は、狙い過たずB25に突き刺さり、胴体上面を舐めた。二〇ミリ弾の何発かは、旋回機銃座を直撃したのか、敵機が一瞬で沈黙した。高峯春夫一等飛行兵曹の二番機、ビスマルク諸島沖海戦で初陣を飾った氷見哲平二等飛行兵曹の三番機が、続けて一連射を叩き込む。

結城は左旋回をかけ、一旦敵編隊から離脱すると共に、第二中隊を誘導する。

後方を振り返ると、四機のB25が黒煙を引きずり、落伍しかかっていることが分かる。

結城は操縦桿を手前に引くと共に、エンジン・スロットルを開いて上昇した。

B25に対して高度上の優位を占め、再攻撃をかけるのだ。

後方を振り返り、中隊の後続機を確認したとき、それは起きた。

何条もの火箭が、第二小隊長を務める永吉卓夫一等飛行兵曹の零戦を横合いから襲ったのだ。

結城が両目を大きく見開いたときには、永吉機は爆発を起こし、空中に巨大な火焰が湧き出している。敵弾は、翼内の二〇ミリ弾倉を直撃し、誘爆を引き起こしたようだ。結城が第二小隊を託したベテランの下士官は、敵機に撃ち込むはずの銃弾によって戦死したのだった。

たつた今永吉機を墜とした敵機は、速力を落とすことなく離脱する。

双発双胴という、特異な形式の機体だ。胴体の後ろを、長い水平尾翼で繋いでいる。零戦や一式陸攻を見慣れた目には、異形に映る。

対峙するのは初めてだが、機体の情報については、盟邦ドイツより知らされている。

ロッキードP38 ユライトニング。米軍の双発戦闘機だ。欧州では、既に北アフリカ戦線やドーバール海峡上空に姿を見せている。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。